

広げよう緑の仲間たち

一子供たちと私達の明日のために一

特定非営利活動法人 天明水の会 代表 浜辺誠司

海

ほうじょう

かつて豊饒の海と言われていた有明海は陸からの恵まれた河川水によって成り立ってきた。このピークは70年代後半である。当時、あさり漁の漁獲量は全国一であり、漁に出る漁船は300隻を超えていた。あさりだけではない。春、満ち潮にのって現れる雑魚の集団には圧倒された。遡上をひかえた鮎の稚魚は時には10畳近いかたまりで河口の船溜まりを覆った。夏の風物詩でもある長い竹の先にひろげた四つ手という漁具。これを堤防から伸ばせば、白エビ、しらうおが面白い程獲れた。

地元のおばあさんが、自分で獲った10kg前後のエビを天日で干し、近所や遠い親戚に配るのを唯一の楽しみにしていた。冷やしそうめんに白エビのダシは天下一品であった。秋、田んぼの稲穂が黄色く色づく頃、ボラに似たシュクチという70cmもある魚がわんさか釣れた。名人といわれ高齢で勇退した地元漁協組合長のその驚異的な釣果記録は今でもいきている。そして冬、夜の満ち潮ともなると川の両岸にはカーバイトの灯りが連なり鰻の稚魚シラスすくい。また、干潟にはのり竹が建ち並び港は活気に満ちていた。手さばき良くのりかごを積み重ね、どのトラックも満載で漁民は笑顔で帰っていった。緑川をひかえた河口漁場は品質がいい旨いのりが育ち、全国でも有数の産地となった。これは汽水域のなせる技でもあった。

漁民の叫び

しかし、1980年代に入ると、豊かな有明海は次第にその姿を変えた。1990年、ついにアサリが緑川河口から消えた。あさり漁に出る漁船は、わずか5~6隻。獲れないことを承知の上で、ただ習慣的に海に通う者だけとなった。良質な干潟が失われ、ヘドロに覆われていた。あさりだけでなく、刺し網漁の網にも魚は取れなくなっていた。川か

ら海へと流れ着くゴミは絶え間なく、海は痩せ、汚れてしまっている。日々河口から海を見ている漁民にとって、その姿の変わりようと、漁獲量が極端に落ち込んでいく様は衝撃的なものであった。漁民にとって、豊かな有明海の存在はまさに生活そのものである。海の荒廃は、人々の生活にも影を落とし、地域経済は衰退し、地域から人が去っていった。

海をなんとか再生したい。地域に住む有志が集まり、有明海のこと、地域のあり方について、夜な夜な夢を語り合った。その中から生まれたのが天明水の会である。1993年(H5)であった。同会は、地域資源である海をきっかけとして、水環境全体をテーマにした地域づくりを目指すことにした。



緑川河口

広げよう緑の仲間たち

一子供たちと私達の明日のために一

特定非営利活動法人 天明水の会 代表 浜辺誠司

活動の当初には、川に目を向けた。河川こそが、有明海が豊かな干潟を形成していくために直接的に影響を与える存在であったからだ。そこで、初期の段階では緑川の河川流域住民へと働きかけて川の一斉清掃を行うなど、流域での連携を意識しての啓発活動に取り組んだ。この流域内での交流が、大きな契機となる。山の人々と語り、実際に上流域の山々を訪ねてまわる中で、山の人々が直面している課題を知ることになったのだ。

海と同様に、上流域の山々もまた、荒廃していたのである。豊かな水は、豊かな森から生まれる。森林のある土壌には、腐葉土が堆積し、雨水がそこを通過する過程で、貴重な栄養分が水に溶け出すのだ。しかし、はげ山だらけとなった上流域に、その力は失われていた。海の復活の為には、豊かな森の再生が不可欠であった。

そこで、1994年（H6）春、緑川、河口にある漁業組合に働きかけ、漁業者による植林を実施することとした。そして、この時の森を「漁民の森」と名づけた。これがその後全国的な展開を見せる漁民の森活動の焚き付け役を担っていく。海に生きる漁師が山へ登る。そして森をつくるという行動が、山と海が、川によってつながっているということを、そして私たち住民一人ひとりの生活もまた、水の循環に絶え間無く影響を与えているという事実をつきつけた。この活動の意義の一つ目は、実際に山に木々を植えることによる効果である。しかし、より大切だったのは、漁民の森という活動の持つメッセージが、流域の人々の意識を変えていくということであった。

子どもたちへの継承

自分たちがすべき課題ははっきりとしてきた。しかしながら、海の再生は気の長い活動である。漁民の森を通じて、自分たちが動くと同時に、この



下刈りの様子

活動をさらに広げていく必要性を感じた。また、恒久的な活動として社会に定着させる為にも、未来を担う子ども達に、海や川や山の役割を体の一部に残してもらい、自らの生活スタイルに取り入れてもらう。そんな視点が必要であった。そこで、翌年1995年（H7）4月、漁民の森の第二段として「緑川の清流を取り戻す連絡協議会」ならびに「脊梁の原生林を守る会」の方々と協力し、地元天明地域の小・中学生、合わせて500人で上流域の山へ登り、5,000本の植樹を行った。そしてこれを「こどもの森」と名づけた。

さらに第三弾は1998年（H10）の4月。再び子どもたちを主役として山の荒廃や、水の浄化について考えてみよう、と、地元の中学生を中心に、山の人たち、一般参加の人たち200名で「有明の森」植林を行った。これは植林地から有明海が見えていたことが名前の由来となっている。

天明水の会の植林では、突如、山間の荒地に何十もの大漁旗がひるがえる。子どもや大人たち、普段は山に登ることのないたくさんの人々が集まる。一本一本確実に木を植え、汗を流す。作業の後は、海に生活する漁師さんたちから「ありがとう」の意味を込めて、あさりの貝汁が振舞われる。人々はこれらの体験からたくさんのことを感じ取る。

植林の間中、参加する皆にすがすがしく、楽しい時間が流れている。そうして楽しみながら取り組みを続けていく様子は、新聞、テレビ、ラジオ、学校教材、あらゆる媒体で紹介された。徐々に、海の再生を目指す漁民の森づくりは、広く一般に理解される活動となっていった。

全国への展開

私たちは、実践を通して、森づくりに対して一つの確信を得ていた。つまり、日本の山、川、海という自然の豊かさは、世界的に見ても貴重な財産である。この貴重な財産を守り、共に生きていく社会を築いていく。「森づくり」がその為にぴったりの活動だという確信である。おもしろいことに、市民団体、学校、あらゆる業種の企業、行政、自治体など、普段交わらない人々が、森づくりという活動の為に、利害関係さえ超えて集まり、一緒に汗を流す。一緒に活動をした仲になれるのだ。これは、森づくりならではの特徴であった。

たくさんの人々が、笑顔で参加できる。その上、一本の木を植えると、間違いなく一本分の環境が良くなる。この活動は、広く多くの人々に受け入れられ、そして、永く続く活動になり得る。そして、天明水の会の思いは、はっきりと全国への活動の広がりを意識し始めた。有明海だけではない。日本の海を再生すること。さらには、日本人の生活スタイルを、自然と共生するものへと発展させていきたい。夢はより大きく描かれた。

そして、社会にもまた風が吹き始めていた。この間、少しずつだが全国各地で森づくりへの機運が高まりはじめていたのだ。そして2001年（H13）、ついに国が動く。国内で市民団体等が実施する森づくりに対して、補助金が出る仕組みが作られたのである。名称は「漁民の森活動推進事業」。農林水産省の補助事業である。漁民の叫びを象徴する

かのような「漁民の森」という名称は、全国で実施される森づくりに対して力を与えていく言葉となった。この仕組みを活用した森は、全国で年間約180箇所になり、この過程を通して本当にたくさんの体験や感動が生まれ、そして実質的に環境を改善していくきっかけとなっている。

熊本県下への展開

一方、天明水の会においても、この補助事業をきっかけとして、漁民の森づくりのより積極的な展開が可能となった。2001年度（H13年度）はそれまで地元地域の学校による活動であったものを、緑川流域一帯の小・中・高校へ案内を送付し、植林を呼びかけることにした。天明水の会が植林の苗木と土地の手配を行い、学校が実施主体となって子どもたちが森づくりを行うという仕組みである。学校単独ではなかなか実現が難しいのだが、民間の活動体である天明水の会との連携によって、森づくりによる体験学習を行うことができる。私たちの役目は、パートナーシップの構築によって、より多くの子どもたちへ体験と感動を伝えていくきっかけ作りをすることであった。

しかしながら、有明海に注ぐ川は緑川だけではない。山・川・海の関係がそうであったように「すべてはつながっている」ということを、強く意識していた。その翌年からは、植林を呼びかける範囲をさらに広げ、熊本県下のすべての学校へ呼びかけを行った。「天明（旧天明町）」という地域から始まった天明水の会の活動は、現在では熊本県全域に拡大している。2005年（H17）4月現在で、熊本県内では65の小中高校が植林を行い、継続して森づくりに取り組んでいる。また、最近の傾向として、各学校での取り組みへ、保護者や、地元の市民団体が協力者として参加されている。このことにより、より継続性の高い活動とすることができている。

広げよう緑の仲間たち

一子供たちと私達の明日のために一

特定非営利活動法人 天明水の会 代表 浜辺誠司

こうして、各関係機関や有志の方々との協働の基に、初期の漁民の森との通算では植林地が36箇所、延べ36.35ha、参加者数は6,360人。その数は年を追うごとに増え続けている。また近年は、熊本県内においても天明水の会に限らず、例えば漁協や、自治体、企業など、非常に多くの団体が主体性を発揮して森づくり活動を実施しておられる。是非、この活動が熊本県の文化であると言えるまでに発展させていきたい。さらには、全国の動きを活性化させ、「木を植える」という行動を、日本の文化にする。私たちはその過程に生きている。

おわりに

数名の人間が動き始めることで、全国に大きな風を呼び起こすことができるということを、私たちは体験した。そして、行動する限りにおいて、日本に豊饒ほうじょうの海を取り戻すことは、ただの夢ではなく、現実達成すべき実現目標となるのだということを知った。そして今、この日本水大賞活動集を読まれている貴方を含めて、私たちは地球という視野を持っている。水にまつわる様々な問題は、今世紀の人類にとっての深刻な課題と言えるだろう。

天明水の会としては、以上の活動の中にあつた体



有明海

験と数え切れないほどの感動の下に、「木を植える」という行動が、人類にとっての水問題をも解決する切り札だと提案していきたい。なぜなら、効果的かつ、今すぐに国や組織、もしくは貧富の差といった枠を超えて、誰もが、身近な生活の中で取り組むことができる行動であるからだ。今後も確実に継続し、発展させていきたい。

最後になるが、水をテーマとしたあらゆる取り組みが、今後もさらに盛り上がっていくことを心から願っている。そうして、たくさんの風が束ねられ、課題が現実解決する日をはっきりと想像しながら、今日も、うまい酒の為に汗を流していこう。